

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19529005

研究課題名 (和文) オン・ゴーイング法と PAC 分析法の活用による日本語教師の実践的思考の解明

研究課題名 (英文) A Study To Clarify Practical Thinking of Japanese Language Teachers By Applications of "On Going Method" and "Personal Attitude Construct Analysis"

研究代表者

小澤 伊久美 (OZAWA IKUMI)

国際基督教大学・教養学部・講師

研究者番号：60296796

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育、教師、実践的思考、PAC 分析、ビリーフ、SEM (構造方程式モデリング)、プロトコル、新人教師と経験教師の比較

1. 研究計画の概要

本研究では、新人日本語教師・経験日本語教師が日本語の授業を観察した際にどのような実践的思考 (授業に関する実践知を用いた思考) を展開するのかを解明することを最終目標におき、質的調査を主とした複数の手法による調査を実施して、普遍性・個別性の 2 方向から分析し、研究方法を確立することを目的としている。

また、上述の実践的思考に関与する要因を特定し、実践的教授能力を育成するための理論や方法論を構築することも重要な目的としている。

具体的には被験者である教師達に授業を見て感じたことをその場でそのまま即興的に語ってもらって得たプロトコルと授業観察語のレポート、PAC 分析法を活用したインタビュー、ビリーフ質問紙調査などを組み合わせ調査する。

それによって、日本語教師が実践場面でどのような実践知を用いた思考をしているかを新人教師・経験教師というグループごとの傾向と個性の特徴との両方の観点から指摘し、教師の実践的思考に影響を与える要因を解明する。そして本研究の総括として、同種の調査をする場合に有効な調査方法と、本研究の成果に基づいて教授能力を育成する方法とを提案したい。

2. 研究の進捗状況

PAC 分析という研究手法について理解を深め、今後 PAC 分析を本研究に活用する際の統

計処理とデンドログラムの問題点を整理した。その成果は PAC 分析学会大会を初めとする研究会での口頭発表や論文として公開されている。PAC 分析研究においてこの問題について取り組んだ研究がこれまでなかったため、今後の PAC 分析を活用する研究者や PAC 分析研究を参照する者にとって有益な情報となったと思われる。

ビリーフ調査の一部として質問紙調査を取り入れているが、それについてはパイロット調査を踏まえて、本調査で使用する質問紙を完成させ、本調査を実施した。

プロトコルや PAC 分析を活用する質的調査の本調査は、予定の対象者のうち 1/3 程度のデータを採取し終えた段階である。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

これまでの 3 年間にパイロット調査などを実施しつつ、PAC 分析の本研究への活用のあり方について検討してきたが、本科研費研究に着手した当初予想していなかった問題に直面し、予定よりも長期に渡ってその問題への対処を検討せざるを得ない状況に陥った。具体的には PAC 分析にその統計処理手順が与える影響、それに付随して気付かされた教師のビリーフの複雑さや揺れの問題である。

これらの問題についてはこれまで先行研究等でも論じられてこなかったため、事例を丹念に分析しつつ問題点を整理し、対応策を検討する時間が必要だった。これは本研究の成果の妥当性や信頼性を考えた場合に必要

不可欠であったので時間をかけた意味はあったと考える。また、その問題についての研究成果は学界にも研究論文や口頭発表の形で還元することができ、多くの研究者の関心と呼ぶ結果につながっている。PAC分析という手法が日本語教育の分野でも活用されることが年々増えていることを考えると、本研究がこれまでに出した成果は社会に貢献する内容になったと自負している。

これまでの2年半の研究の中でこれらの問題への対処などにも目処がついてきたので、最終年度では本調査を終えて、収集し終えたデータの丁寧な検討を実施する予定である。遅れてしまった時間の分だけ今年度の分析に使える時間が減少してしまったことになるが、データ（特に質的データ）を十分に生かした研究成果を出すためにも、科研費研究期間終了後にも丁寧にデータを分析・考察し続ける形で調整したいと考えている。

4. 今後の研究の推進方策

これまでにPAC分析を本研究に活用するための問題点や手続きなどを検討した結果、PAC分析のインタビュー・データの取り扱い（特に解釈・分析、そして記述のありよう）について研究着手当初よりも丁寧に検討を重ねる必要があることが判明したため、今年度はインタビュー・データに基づく質的研究のありようをPAC分析法との関係から検討し、本研究に最も適した方法を見定める予定である。

質的調査で得たデータについては、因子間の相関を見ることが可能な構造方程式モデリング(SEM)を活用して分析する。

質的調査についてはこれまでに得たデータの分析を進めつつ、残りの対象者からもデータを集め、その分析を進める予定である。

年度末までに得られた成果は報告書にまとめる予定であるが、研究着手当初よりも本調査実施に至るまでに精査すべき点の検討に時間がかかったため、データの丁寧な分析は今年中に終わることが難しく、報告書執筆後も引き続き分析・考察を続けて、研究成果を公開していきたいと考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

1. 丸山千歌、小澤伊久美、「日本語学習者と読解教材のインタラクションの解明に向けた縦断的調査—PAC分析を研究手法として—」、『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』17、横浜国立大学留学生センター、101-133、2010、査読有
2. 小澤伊久美、丸山千歌、「PAC分析における好ましい統計処理とは—ソフトウェアに

よってデンドログラムが相違する問題への対処のために—」、『ICU日本語教育研究』6、ICU日本語教育研究センター、27-47、2009、査読有

3. 坪根由香里、嶽肩志江、小澤伊久美、教師のビリーフ研究におけるPAC分析活用の可能性と留意点—HALBAUとSPSSによる分析結果の相違についての考察から—」、『言語文化と日本語教育』38、お茶の水女子大学日本語文化学会、30-38、2009、査読有
4. 嶽肩志江、坪根由香里、小澤伊久美、教師の実践的思考を探る上でのビリーフ質問紙調査の可能性と課題—日本語教育における教師の実践的思考に関する研究(3)—」、『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』16、横浜国立大学留学生センター、37-56、2009、査読有
5. 要弥由美、小澤伊久美、「統計は怖くない！図を見てわかる直感的統計分析 論理解のための構造方程式モデリング (SEM) 入門」、『日本語教育実践研究フォーラム報告』WEB版、11頁、<http://www.soc.nii.ac.jp/nkg/kenkyu/Forumhoukoku/kk-Forumhoukoku.html>、2008年、査読有
6. 丸山千歌、小澤伊久美、「PAC分析におけるフェイスシートの開発に向けた課題—日本語教材と学習者のインタラクションの解明に向けた研究のために—」、『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』15、横浜国立大学留学生センター、3-19、2008、査読有

[学会発表] (計4件)

1. 小澤伊久美、「SPSSとHALBAUによるPAC分析インタビューの比較—デンドログラムの相違がインタビューに与える影響についての考察—」、PAC分析学会第3回研究大会、於明治学院大学、2009年12月19日。
2. 坪根由香里、「日本語教師のビリーフ調査へのPAC分析の活用について—先行研究とパイロット調査との比較から—」、PAC分析学会第2回研究大会、於東邦大学、2008年12月6日。
3. 要弥由美、「研究手法体験型ラウンドテーブル 統計は怖くない！ 図を見てわかる直感的統計分析 論理解のための構造方程式モデリング (SEM) 入門」、2008年度日本語教育学会実践フォーラム、於早稲田大学東伏見キャンパス、2008年8月3日 (予稿集131-134頁)
4. 小澤伊久美、「日本語教師のビリーフ調査へのPAC分析の活用について—先行研究とパイロット調査との比較から—」、PAC分析学会第1回研究大会、於和光大学、2008年3月1日 (抄録21-24頁)。